

虫よけスプレーをつくる

年長 たか2組



1学期に「実験」と称して、ボンドを水で薄めたり、固まらせたり、様々な素材を工夫して楽しんでいたRちゃんとEちゃん。夏休みが明けたある日、「虫よけスプレーを作りたい」という声が二人から挙がりました。その日は、お決まりのボンドと絵の具で、「実験」をしましたが、面白い発想だなと思ったので、集まりの時にみんなに聞いてみました。

すると、「うち、虫よけスプレーを家で作ってるよ」とYちゃん。「作り方を聞いてきて」とお願いすると、翌日レシピを持ってきてくれました。必要なものは、エタノールやオイルとあり、ハーブ類から油を抽出する必要があります。

1学期のお別れ会でのゼリー作りや、夜の幼稚園でのカレーやコンソープ作りでは、家庭にもご協力をいただき、自分で作り方を調べたり、実際に家でもやってみたりすることを繰り返し行ってきました。その経験が2学期にも活かされます。虫よけスプレーの件をお便りで書いた翌日、「お家で作ったよ〜」とKちゃんが、自宅で作った虫よけスプレーとレシピを持ってきてくれました。

さらに、自宅で虫よけスプレーを作っていたYちゃんは、ローズマリーともう少し簡単なレシピを、そして冒頭のEちゃんは自宅から「ゼラニウム」を持ってきてくれました。二人が持ってきてくれたレシピを見てみると、「お湯で煮てみる」とか「お湯を入れ、2週間待つ」など、試しにやってみるには最適な方法が書かれています。子どもたちも「それならできそう!」ということで、翌日に虫よけスプレー作りが始まりました。

ハーブ類としてはゼラニウム、ローズマリー、ミント(園に咲いている)を準備し、お湯で煮ていきます。良い香りがするものの、意外だったのはスパイシーなローズマリーの薫りは煮たほうがマイルドになることでした。

初日は「やってみる」こと自体が目的です。2日目に挑戦したAちゃんとSちゃんは「色」の変化に気づきません。初日に作ったミントはすぐに緑色の色がついたのに、何故かこの日は色がつきません。「水の量が足りないのかな?」「ミントが足りないのかな?」と疑問をもち、色々試して行い、苦心してようやくほのかな緑色になりました。最後に入れたのは「ミントのお花」。これを入れたことで、色がついたのです。

家庭のご協力を受け、調べたり、実際にやってみたりしながら、子どもたちの興味にジワジワと火がついていきました。子どもたちの探究心の高まりには、園と家庭との豊かな経験が欠かせません。保護者の皆様には、いつも感謝しています。(教諭・西井宏之)



現在、フタのある菓子折の箱を求めています。大きさは問いません。ご協力お願いします。(たか2組)





仲間とつながるかくれんぼ

年少 つくし組

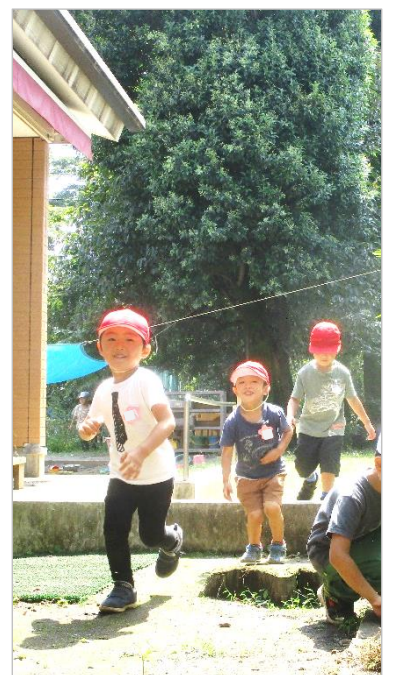


2学期が始まり、門から子どもたちだけで登園するようになりました。「〇〇ちゃんは、まだかな～」 「あ、きたきた！おはよう」と子どもたちが仲間を出迎えます。支度も手早く済ませ、「昨日の続きをしようよ」と遊びだすようになりました。

今、園庭では、子どもたちは繰り返し、かくれんぼをしています。「かくれんぼやろう～」 「やる人～」と仲間を集め、隠れる人と鬼になる人を決めて、始まります。隠れる人は園庭中を走り回り、ここぞという場所に潜り込みます。1学期には、かくれんぼをしても、なかなか見つからないとすぐに諦めて、違う遊びをしていた子どもたちがいました。しかし、今では、見つかるまで、ひたすら探すようになりました。鬼になった子には探すワクワク感があり、隠れている子には見つかるかどうかのドキドキ感があります。

ある日のかくれんぼ、Aちゃんと私は道具小屋の近くに干してあったシートで身を隠し、息をひそめていました。鬼は近くを通るものの全然見つかりません。「〇〇ちゃん、あっち探して！」と手分けをして探す声に子どもたちの成長を感じながら隠れています。するとすぐ後ろから、K先生とBちゃんの声がしてきました。「あの～美智子先生がいなくなっちゃったんだけど、どこにいるか知っている？シマシマのお洋服を着ていて、こ～んなに大きい子なんだけれど」と体中で、私の大きさを表現していたそうです。「知らないな～見なかったな～」 「そっか～」と振り返った瞬間、どうやら私のエプロンが見えたようで、「みつけた！」とつかまってしまいました。見つけた方も、見つかった方も一気に笑顔になります。この出会いの瞬間がたまらなくて、繰り返し遊ばれるのでしょうか。隠れている間、「もう、おかえりになっちゃうね」と心配していたAちゃんは、見つかってホッとしています。ほどなくして、ほかの鬼もやってきました。「もう全然見つからないから心配したよ」「Aちゃんも心配したよ」「見つけてよかったね」「あ～楽しかった」「また明日、やろうね」と約束して、クラスに戻りました。

仲間を信じて待つ、ここにいるかな？と想像しながら仲間を探す、仲間と共に明日につながる楽しさをたくさん見つけている子どもたちです。（教諭・深田美智子）





遊びのなかでからだを動かす

安倍大輔

白梅学園大学子ども学部准教授



白梅学園大学では子どもの健康や運動、スポーツに関する授業を担当し、それらをテーマに研究を行っています。今回は子ども、特に幼児期のスポーツについて私が感じていることを述べたいと思います。

コロナ禍で開催された東京オリンピック・パラリンピックは、10代の若いアスリートの活躍が目立っていました。近年、オリンピックに限らず、小学生や中学生の頃から将来を期待される選手が色々な種目で見られます。

そうした若いアスリートの活躍によって自分の子どもにも何かスポーツをさせたいと思う親も少なくないです。実際に、今回のオリンピックでのスケートボード選手の活躍をきっかけにスケートボードが子どもたちに人気だということです。

一方で、子どもが外で遊ばなくなったと言われて久しいです。今は携帯ゲーム機やスマートフォンでゲームを遊ぶことができ、特にスマートフォンの普及によっていつでもどこでもゲームで遊べ、また動画を観ることもできます。スマートフォンで遊ぶ時間が、子どもが外

で遊ぶ時間にとって代わっていると言っても過言ではないでしょう。

これらのことを背景に、幼児期から子どもが体操クラブやスイミングクラブに通っていたり、幼児体育の会社から派遣されたインストラクターの先生に幼稚園や保育園で運動・スポーツを教わったりしていることが珍しくなくなっています。しかし、本来、大人の文化であるスポーツは遊びの代わりを全て果たしてくれる訳ではないということを園の先生や親は認識しておくことが必要だと思います。

確かに、走ったり、跳んだり、ボールを追いかけたりすることは、外遊びが少なくなって、からだを動かす機会が減っていることを補ってくれるでしょう。しかし、スポーツには「ルール」がありコーチや先生に「指導」されることが一般的です。そのため、子どもたちが友達同士で遊ぶ時のように、自由にルールを変えたり、自分たちの好きなように楽しんだりすることはできません。

子どもたちは自分のところからからだを自由に解放して遊ぶことを通じて様々なことを身につけていきます。そのため、「うちの子はスポーツクラブに入って運動しているから大丈夫」ではなく、子どもが子どもらしく、自由にのびのびと遊ぶことができる機会も持つことが大切だと思います。



遊び環境を皆でつくりとくみ

2021 年度園庭ワークショップより

幼稚園では、保護者有志、OB、学生ボランティアのご協力をいただいて、一級建築士の井上寿先生のご指導を受けながら、2日間にわたり子どもたちの遊びの環境づくりを行いました。

今回は、ロープや小屋などのメンテナンスに加え、子どもの遊びを豊かにするための道具を製作しました。すなわち、多目的カウンター、可動式L字型仕切り、子どもたちの遊具入れ(収納小屋)などで、数か所に分かれて作業を進めました。井上先生が描いてくださった図面を基に、材料の木の長さを測り、印をつけ、切ったり、組み立てねじでとめたり、やすりをかけたりするなど、初めは工具を使って慎重に、慣れてくると時に思いっきり作っていきました。

カウンターの屋根や壁はどのようにつけるかなど、子どもたちが使う様子を想像しながら決めていきました。井上先生からは、安全性や使い勝手、子どもの動きの予想など、製作途中でアイデアが投げかけられます。収納小屋については使いやすさを考えながら、子どもたちが園庭で使う物を整理できるようにしていきました。

このように、ワークショップでは、参加された大人が交流しあい、子どもが遊んでいる姿を話題としあったり、作業のやり方を伝えあったりして一緒に作っていきました。細かな柵から大きな物まで予定より多くの物ができ、人の力の大きさを感じました。物づくりの楽しさはこの上なく、皆で力をあわせてつくりあげた達成感を得られたように思います。

別の日、子どもたちはそこに砂場の道具を運んでお料理やお家づくりをはじめ、カーテンをかけて日よけにしたり、ゴザを敷いて場を広げたりしていました。収納小屋により子どもたちは物の出し入れがしやすくなった様で、園庭に様々な設定の遊びがなされています。

今後も、子どもたちが自ら遊んでいかれる環境を皆でつくっていきたくと考えています。(副園長・霜出博子)

